中世・草戸千軒探検㉖ ～祈る〈信仰〉～

草戸千軒Ⅰ展示室では，今からおよそ700年前の鎌倉時代後期を中心とする時代の，草戸千軒の町並みを実物大で復元するとともに，実際の出土資料を生活の場面ごとに分類して展示し，人々の生活の様子を詳しく紹介しています。

今回は，「祈（いの）る」のコーナーに展示した資料から，この町に暮らした人々の信仰について紹介します。

草戸千軒町遺跡からは生活用具をはじめとする多数の遺物が出土しており，当時の人々がどのような道具に囲まれて暮らしていたのかが明らかになりました。その一方で，具体的なイメージをつかみにくいのが，人々がどのようなことを考えて暮らしていたのか，つまり心の中に広がる精神世界です。これはもちろん，心の中の動きが直接的には遺物として残らないことに理由があります。

それでも，信仰に関係するいくつかの道具からは，当時の人々の精神世界の一端をしのぶことができます。その代表的なものが，亡くなった人への思いを伝える葬送や供養などに関係する資料です。

【写真１】展示室の石塔
（左：五輪塔，中・右：宝篋印塔）

遺跡からは40基ほどの墓が見つかっているほか，供養のために作られた300点近くの石塔も出土しています（写真１）。石塔のほとんどは，本来設置された場所から移動した状態で出土していますが，その多くは五輪塔（ごりんとう）と呼ばれる型式によって占められています。また，泥塔（でいとう）と呼ばれる土製の五輪塔も出土しており（写真２），中世の人々にこのような五輪塔が広く受け入れられていたことがわかります。

【写真２】五輪塔形の泥塔

また，墨書のある木札類にも，信仰に関わる資料が数多く含まれています。たとえば，（写真３）は亡くなった人を供養するための位牌（いはい）ですが，「丙辰（ひのえたつ）」の年の６月６日に亡くなった「道圓禅門」という男性と，「甲子（きのえね）」の年の６月３日に亡くなった「妙通禅尼」という女性が，同じ位牌に並んで記されています。生前，二人は夫婦であったと考えられ，いっしょに出土した土器の型式から，男性は明応５年（1496），女性は永正元年（1504）に亡くなったことがわかります。位牌に並んで記された二人の結びつきや，亡き夫婦をあわせて供養した人々の心はどのようなものだったのだろうかと考えると，数百年の時間を超えてもなお，想いはつきることがありません。

【写真３】夫婦の法名が記された位牌

（主任学芸員　鈴木康之）